

「なかったこと」にしないための協同作業 ——『燃ゆる女の肖像』における中絶表象

関根 麻里恵

0. はじめに

「なかったこと」にしない。誰かにとって不都合なものであり、脅威をもたらすものだと思い込まれていることを雲散霧消にしないというのは、そう容易いことではない。しかしそれでも「なかったこと」にしないために試行錯誤してきた先達がいる、それに気づいた人々がエンパワメントされて別の仕方で声を上げるという連帯のあり方は、今も昔も存在し、そして未来にも存在すると信じている。映画『燃ゆる女の肖像』(*Portrait de la jeune fille en feu*, 2019 年)は、先達からのバトンを受け取り、そのバトンをほんの少しの希望とともに次世代へと託そうと試みた作品として評価したい。

『燃ゆる女の肖像』における「先達からのバトン」は一体何か。本作の監督を務めたセリーヌ・シアマは、本作を制作するにあたってフランスの文筆家アニー・エルノーの小説「事件」(*L'événement*, 2004 [2000])に影響を受けていることをインタビューのなかで明言している。「事件」は、1963 年 10 月から 1964 年 1 月に起こった「わたし」の事件(＝人工妊娠中絶、以降は中絶と表記)を 1999 年 2 月から 10 月にかけて記述したもので、フランスにおいて中絶を合法化したヴェイユ法が施行(1975 年 1 月 17 日)される以前の「なかったこと」にされた女性の経験をありありと記録している作品だ。

ライターレイチェル・サイムは記事のなかで、シアマがエルノーの「世界中のどの美術館にも、〈天使製造者⁽¹⁾の仕事場〉という作品は存在しないと思う」(エルノー 156)という一文に感銘を受けたことに触れたうえで、本作について紹介している(Syme 2020)。また、批評家のエミリー・セントジェームス⁽²⁾がおこなったインタビューでシアマは、中絶を描いた絵画が飾られている美術館は世界中にない、すなわち中絶という行為が決して表現されることがない＝「なかったこと」にされていることについて疑問を呈している(St. James 2020)。

「事件」には、これまで女性たちが経験してきた中絶の記録が残されていないこと、そして、それらが「なかったこと」にされないためにはどうすればよいのかについて言及している箇所が複数登場する。長くなるが、これもまた「なかったこと」にしないためにいくつか引用したい。

ある晩、夢を見た。自分の中絶に関して書き上げた本を手を持っているのだけれど、それは書店のどこにも見あたらず、どのカタログにも載っていない。表紙カバーの下のほうに、大きな活字で“絶版”と記されている。その夢の意味が、その本を書かねばならないということなのか、書いても無駄だということなのかはわからなかった(エルノー 95)。

妊娠中絶に触れている小説はたくさんあるにしても、それが正確にどう行われたかという、その方法に関する詳細を提供してはくれない。若い女が妊娠しているのを知った瞬間と、もはやそうではなくなった瞬

(1) 天使製造者(*Faiseuse d'anges*)とは、望まない妊娠をした場合に、その妊娠を終わらせるために自発的に行動する(大半の場合は)医師ではない女性のことを指し、1877 年にフランスの言語学者・哲学者のエミール・リトレは、「自分に託された乳幼児を故意に死なせる看護婦」と定義している。

(2) ワークショップ開催時(2022 年 1 月 29 日)まではエミリー・ヴァンデルワーフ(*Emily VanDerWerff*)であったが、現在は名前をエミリー・セントジェームス(*Emily St. James*)に変更している。そのため、本稿では現時点で本人が使用している名前を表記することとする。

間とのあいだには省略がある（エルノー 107）。

この種の話は、苛立ち、もしくは反発を引き起こすかもしれない、あるいは、悪趣味だと非難されるかもしれない。何であれ、あることを経験したということが、それを書くという侵すべからざる権利を与えてくれるのである。真実に優劣の差はない。それに、この経験との関係を最後まで突き詰めないならば、わたしは女性の現実をおおい隠すのにひと役果たすことになるし、この世の男性支配に与することにもなってしまう（エルノー 124-125）。

引用からもわかるように、エルノーは中絶の痕跡を描くことのみならず、それが「なかったこと」にされてきたという事実をも小説のなかに書き記した。こうすることで、単純に「なかったこと」にされた経験を取り戻すだけでなく、「なかったこと」にされてきた事実そのものを読者に突きつけることで揺さぶりをかけたといえるのではないだろうか。

以上を踏まえて『燃ゆる女の肖像』のプロットをみてみよう。メインプロットとなる画家マリアンヌと伯爵令嬢エロイズの情熱的な関係は、これまで女性同士の親密な関係——とりわけ脱性化されたセクシュアリティ——が不可視化されてきた、つまり「なかったこと」にされてきた関係を描こうとしていることがうかがえる。それに加え、メインプロットではないものの、マリアンヌとエロイズとの関係の潤滑油的な立ち位置にある女中ソフィーの中絶が描かれていることは注目に値する。

本稿では、『燃ゆる女の肖像』のなかで描かれる不可視化された女性たちの経験のうち中絶の表象と、それを「なかったこと」にしないための協同作業のシーンを中心に分析を試みる。とくに登場人物たちがそれぞれの仕方で「なかったこと」にしないために痕跡を残そうとする一連の描写は、「なかったこと」にされることへの抵抗それ自体までも描ききったものとして評価することが可能だろう。

1. 映像作品における中絶表象

まずは、映像作品における中絶表象の先行研究を概観していく。

社会学者のグレッチェン・シッソンとカトリーナ・キンポート（2014）は、アメリカの大衆文化において、中絶の話は珍しく、避けられ、永続的にタブーであるという推定が一般的であり、依然として映画やテレビにおける中絶の物語の数や妊娠の結果を描いた物語について包括的な調査が行われていないこと、そして大衆文化がどのように中絶を描写しているかを明確に示す研究がないことを指摘している（413）。

シッソンとキンポートは中絶の意思決定について体系的な評価を行うために、1887年から2013年までに公開されたアメリカの映画やテレビにおける中絶のプロットラインを体系的に調査・分析した（414）⁽³⁾。二人は、オンライン・データベース IMDb 内で「abortion」がタグ付けされているものを検索し、対象を（a）米国で視聴可能（b）英語（c）脚本付きの長編作品（短編作品は除く）（d）2013年2月1日以前に放映されたものに限定して調査（2012年12月と2013年2月の2回）、そこから310作品のプロットを抽出した（414）。そこからさらに302作品に妊娠結果のプロットを確認し、そのうち173作品（57.3%）が中絶、80作品（25.8%）が育児、13作品（4.2%）が養子縁組、21作品（6.7%）が流産、16作品（5.1%）が未解決を含むプロットであるという結果を導き出した（416）。さらに考察のなかで、妊娠結果の全体的なパターンは現実の統計と一致しないこと、そして中絶に関するストーリーで死が描かれることが多いことを明らかにした（417）。それはすなわち、実際には中絶で命を落とす確率は低いにもかかわらず、中絶した女性に対する罰としてプロットのなかに死が用意されているということを意味する。

映画学者の木下千花（2012）は、妊娠と産の表象を含む映画を「妊娠映画」——木下も強調しているが、「妊娠映画」は決して「母性の表象」ではない——と呼び、1948年頃から1956年にかけて製作・公開された日本の妊娠映画において、中絶が中心的な事象であったことを指摘している（146-147）。木下は、第二黄金期の日

(3) シンポジウム時には調査対象の期間を1916年から2013年までと報告したが、正しくは1887年から2013年までである。

本映画史を妊娠映画史ととらえ、映画のなかで描かれる中絶ないしはその可能性の傾向として、シッソンとキンポートのいう「中絶した女性に対する罰」もみられる一方、1956年以前は「夫婦間の性交渉の帰結として映画の物語内に浮上し、あくまで社会・経済的な問題として真面目に捉えられ、「殺人」というより、女性のやむにやまれぬ、しかし主体的な「選択」として提示」されていたことを明らかにしている（148）。

ジェンダー研究者のカシア・ロス（2020）は、過去10年間の映画やテレビにおける中絶描写が流行していると同時に複雑なものになっていることを示すために具体的な作品名を挙げつつ、そこでは実際の中絶シーンが描かれることはないことを指摘している（Roth 2020）⁽⁴⁾。例外として、チャウシェスク政権下のルーマニアを舞台にした『4ヶ月、3週間と2日』（4 luni, 3 săptămâni și 2 zile, 2007年）⁽⁵⁾を挙げているが、この作品において中絶シーンをレイプに近いものとして表現していることに言及している（Roth 2020）。

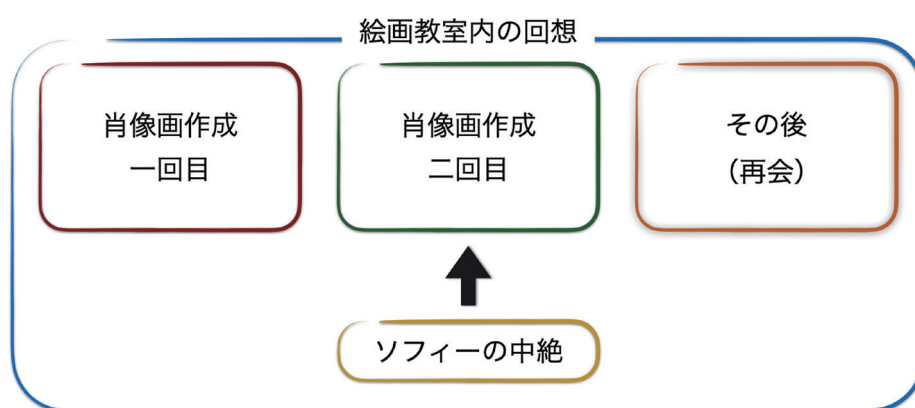
以上のように、映像作品における中絶表象は国による違いこそあれ、意図的に事実を歪められてきた、もしくは描かれても肝心の部分は描かれてこなかったといえる。そしてまた、研究のなかでも中絶表象自体がいままで看過され、「なかったこと」にされてきたともいえるだろう。

2. 『燃ゆるの肖像』における中絶表象

セントジェームスによるインタビューのなかでシアマは、本作における中絶のプロットは二つのシーン——①中絶そのもののシーンと②中絶の経験を記録するシーン——で構成していると説明している（St. James 2020）。本稿では①の中絶を行うまでの過程の描写と実際に中絶手術を行う描写、②を絵を用いて記録する描写と刺繍を用いて記録する描写に細分化して検討してみたい。

2-1. 『燃ゆる女の肖像』の構成

本作品の構成をおおまかに表すと【図式1】のようになる。大枠はマリアンヌが絵画教室内で生徒たちに話す回想で、彼女が画家であることを隠しながら肖像画を作成する一回目の作業、エロイーズの協力を得て肖像画を作成する二回目の作業、そして一度回想を終えた後にマリアンヌ個人で回想するその後（再会）の三つに分けられる。中絶表象はこのうち二回目の作業の際に同時進行でおこなわれる。

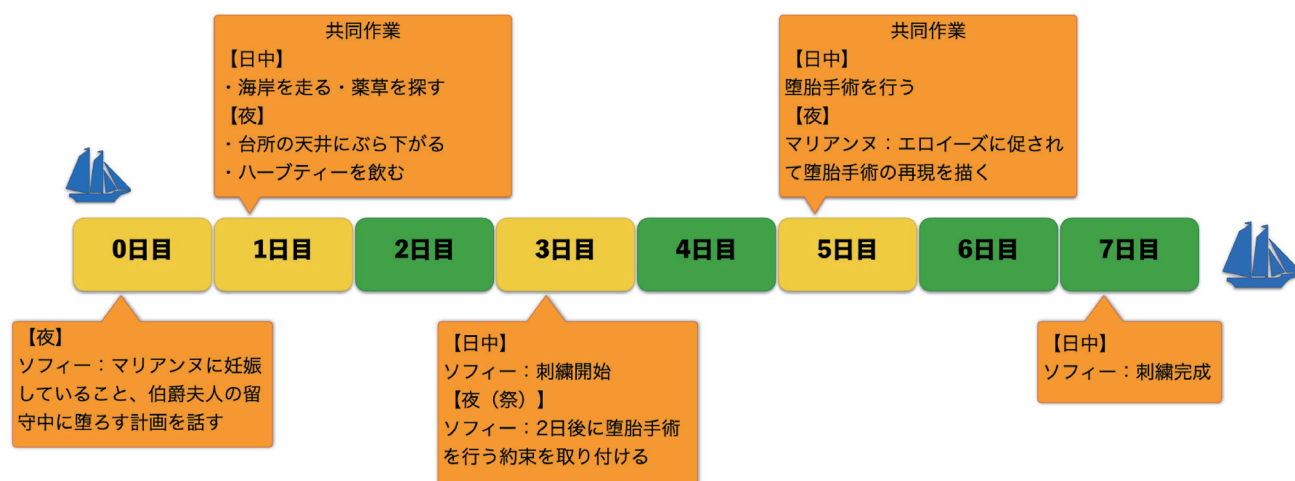


【図式1】 本作品の構成（筆者作成）

(4) ドラマシリーズの例として、『GIRLS/ ガールズ』（Girls, 2012-2017年）シーズン1第2話「下半身パニック！」（Vagina Panic, 2012年）とシーズン4第6話「レイ、物申す！」（Close-Up, 2015）、『ジェーン・ザ・ヴァージン』（Jane the Virgin, 2014-2019年）、『フライデー・ナイト・ライツ』（Friday Night Lights, 2006-2011年）、『セックス・エデュケーション』（SEX EDUCATION, 2019年-）、映画の例として『JUNO/ ジュノ』（Juno, 2007年）、『Obvious Child』（2014年）、『愛しのグランマ』（Grandma, 2015年）、『17歳の瞳に映る世界』（Never Rarely Sometimes Always, 2020年）を挙げている。

(5) ロスは2008年と記述しているが、IMDbでは2007年になっているため記述を変更している。

“4 luni, 3 săptămâni și 2 zile (2007)” IMDb. <https://www.imdb.com/title/tt1032846/>（最終閲覧日：2022年6月28日）



【図式 2】 中絶をおこなうまでの時系列（筆者作成）

中絶をおこなうまでの時系列を図式化すると【図式 2】のようになる⁽⁶⁾。0 日目、1 日目、3 日目、5 日目が具体的に中絶に関連する行為があった日だ。

2-2. 「母性」に回収されない選択——中絶そのものを描く

前述したように、中絶そのもののシーンは中絶を行うまでの過程、そして中絶手術を行うシーンに分けることができる。まずは前者からみていこう。ソフィーがマリアンヌに月経が三ヶ月きていない＝妊娠していることを打ち明け、エロイズの母親でありソフィーの雇用主である伯爵夫人がいない期間を利用して、中絶の計画を実行する（00:56:40）。三人はありとあらゆる民間療法——海岸で走ったり（00:56:43）、台所の天井の柱を利用してぶら下がったり（00:57:41）、採取した植物からハーブティーを作って飲んだり（00:58:59）——を行うもののいずれも効果はなく、最終的に島の助産師の手を借りることになる。

ここで重要なのは、身分の異なる三人の女性たちが中絶を協同で行うという点である。中絶表象の傾向として、誰にも言えず、孤独に耐え、男性の手によって——もしくは自分の手で——行われるものとして描かれる。しかし、本作では中絶を行うまでの過程と、三人の関係が深まる様子が同時進行で描かれており、中絶という行為を「母性」の名のもとに無理に辞めさせたり、非難したり、相手を追求しようとする人物やシチュエーションは一切登場しない。本作における中絶表象は、「中絶した女性に対する罰」という要素を排することに成功しているといえよう。

次に、後者（中絶手術を行うシーン）をみていこう。中絶手術当日、三人は島の助産師の家に訪れるが、なぜかマリアンヌは終始落ち着きがない。苦しむソフィーの姿をみて思わず目を背けてしまうマリアンヌに対してエロイズが「見るんです」と促し、おそろおそろソフィーに目を向ける（01:26:48）。ベッドの上の赤ん坊は、手術中、痛み堪えるソフィーを見守るように手を差し伸べ、術後に涙を流すソフィーの目をそっと拭う（01:27:25）。このシーンにおける赤ん坊とソフィーの関係は、一体何を意味するだろうか。ともすると安易に「母性」——赤ん坊を目の前にして、産むことができなかったことに対する自責の念や後悔——と結び付けてしまう危うさ、すなわち「中絶した女性に対する罰」の要素がこのシーンには表出してるかのようにみえてしまう。

しかし、シアマはこのシーンについて、中絶をするのは子供が欲しくないからではなく、中絶は女性が主体的に選択して望むときに子供を産むためのものであることを観客に伝えたかったと言及している（St. James 2020）。シアマの意図を踏まえて改めてこのシーンを検討してみると、ベッドの上の赤ん坊はソフィーの選択を後悔させるための誘発装置——産むことができたかもしれない赤ん坊の代理表象——としてそこに在るわけ

(6) 公式には伯爵夫人のいない期間は5日間となっているが、確認してみたところおよそ7日間であることが判明した。

ではない。生まれて間もない赤ん坊と中絶を選択したソフィーが俯瞰ショットで同じフレーム内におさめられることで、精一杯生きようとする者同士であるとみなすことができる。そして、二人が手を握り、ソフィーの涙を赤ん坊が拭う行為も、精一杯生きようとするためのソフィーの選択を励まし、称えるものだといえよう。二人の関係を二項対立的にとらえるのではなく、共に生きる者同士の協同作業としてこのシーンを解釈することができるのではないだろうか。

2-3. 「なかったこと」を自分のものにする——中絶の経験を記録する

次に、中絶の経験を記録するシーンについて検討していく。まずは絵を用いて記録するシーンを確認していこう。1日目の夜、マリアンヌがエロイーズの問いかけに対する返答として中絶の経験があることを打ち明けるが(00:59:36)詳細は告げなかった(00:59:38)。また、ソフィーの手術中、凝視するエロイーズに対してマリアンヌは当事者であるソフィー以上に落ち着きがなく、エロイーズに促されるまで目を背けたままであった。こうした様子から、おそらくマリアンヌにとっての中絶は、作中では言及されなかったものの前述したような「中絶した女性に対する罰」の側面が強い経験だったと推察する。

ソフィーが中絶を終えた夜、マリアンヌの寝室に集まった三人はエロイーズの提案で手術中の様子を再現し、マリアンヌに描くことを促す(01:28:49)。これはすなわち、「なかったこと」にしないための記録を自分たちの手で残そうとする協同作業である。エロイーズがソフィーに絵のポーズをとれるほど体調が回復したかどうか尋ね、エロイーズが助産師役、ソフィーが自分役となり、マリアンヌが描く。中絶そのもののシーンにおいて言及を避けたり視線を外していたマリアンヌだが、中絶を描くシーンに入ると画家としてのスイッチが入ったのか、しっかりと二人の姿を見つめ、筆を走らせる(01:30:06)。

こうした一連のシーンから、マリアンヌにとってソフィーの中絶を描くことは自分の経験を俯瞰して描くことでもあったのではないだろうか。つまり、自分自身のなかで「なかったこと」にしたかった中絶という行為を、自分が身につけている技術を用いることでようやく自分の手に取り戻し、受け入れることができたのではないだろうか。また、エロイーズの提案の背景には、近い将来、貴族に嫁ぐことで自分の身体を好き勝手できない立場になること、すなわち中絶を選択することが自分の意志ではできない立場になるがゆえに、「ありえたかもしれない」経験を凝視し、記録を残したいという欲望に突き動かされたとみなすことができる。しかし、留意すべきは、こうした行為は程度の差はあれソフィーよりも自由な立場であるがゆえの特権、どんなに接近しようとも超えられない階級差があるという事実である。それでも、そのとき限りの連帯であっても、「なかったこと」にされないために協同して記録を残す行為が行われたという意味では、階級を一時的に無効化した連帯の描写であったといえるだろう。

次に、別の方法で残すシーンを確認していこう。絵として記録するシーンは、マリアンヌやエロイーズの意向が全面にあるものだったが、ソフィーも自分が身につけている技術——絵のように芸術とすらみなされなかった刺繍——を用いて、数日間にわたる協同作業と自身の中絶の経験を残そうとしていた。これは、二人すらも気づかない、ソフィーだけの私的な記録だ。

そもそも針仕事(needlework)は、中産階級の女性たちに対しては、慎ましさと従順といった美德と結びついた技能とみなされ、家庭を守る女性のたしなみとして重要視されてきた一方で、労働者階級の女性たちに対しては、自家裁縫や生計手段の確保に役立てる目的のために必須とされた技術であった(中谷 205)。また、中産階級の女性たちは「家庭が家族にとって道徳にかなった環境にあること、『ふさわしい』趣味で飾られていることを保証する」(中谷 204)ことを求められ、部屋をセンスよく「飾る」ための刺繍やかぎ編みの技術を習得するようになった。しかし、針仕事に対して刺繍やかぎ編みは実用性が低いため、次第にそうした手仕事をを用いて部屋を「飾る」行為自体を、女性特有の無駄で余分な振る舞いとみなされるようになった。このように、針仕事ひとつとっても、その時々によって当人があずかり知らぬところで都合よく解釈が変更されてきたことがうかがえる。かぎ編みの道具であるかぎ編み棒が、自らの手で中絶を行う際の道具として用いられてきたことは、ある意味でそうした理不尽な状況に対する一種の抵抗だったのかもしれない。

ソフィーは中絶手術を依頼する日の昼間から刺繍を開始し、伯爵夫人が帰ってくる前日に完成させている。

刺繍を開始したシーン（01:09:57-01:10:14）からは生き生きとした植物と体内にいる胎児を、刺繍の完成間近のシーン（01:38:16-01:38:34）からは枯れきった植物と体外に排出された胎児を連想させる。両シーンはほとんど同じ構図だが、そこに映し出される植物と刺繍の状態だけが異なり、全体的な色味も黄色みが強いものから青みが強いものへと変化している。加えて、最初に刺繍を施したローズマリーの花言葉が「思い出、記憶」であることも、それぞれの花の色がマリアンヌ、エロイズ、そしてソフィーのドレスの色と重なり合うことから、彼女が刺繍をする行為が、自分自身の中絶の経験および三人で過ごした日々を誰にも奪われない形で記録していると読み取ることができるだろう。

3. おわりに

『燃ゆる女の肖像』における中絶表象は、「中絶した女性に対する罰」という要素を排することで女性の選択を肯定的に描き、中絶そのものだけではなく、中絶の経験を登場人物たちが自らの手で記録しようとするシーンを描くことで、「なかったこと」にされることへの抵抗それ自体までもを描ききったといえる。とりわけソフィーの刺繍は、注意深く見ないかぎり見過ごされてしまう記録行為であるが、同じ構図のシーンが二度に渡って登場することで鑑賞者はこの行為が重要な意味を持つものだと気づく。

ロスシアマのこうした手さばきを踏まえ、本作について次のようにまとめている。

それは、たとえ不完全であっても、リアルで、体現された経験に根ざした、女性のまなざしによって、女性のために作られた「中絶」の物語を観る者に提供するのだ。([...] *It provides the viewer with an abortion story, however imperfect, that's real, rooted in lived, embodied experience, and made by and for the female gaze.* [...]) (Roth 2020、日本語は筆者拙訳)

こうした登場人物のささやかな行為にまで目配せがなされている『燃ゆる女の肖像』は、これまで「なかったこと」にされてきた女性のために作られた「なかったこと」にされないための物語と評することができるだろう。

そして、マリアンヌが絵で残したように、また、ソフィーが刺繍で残したように、筆者はまさにいまここに書いているものをもってして、彼女たちの行為を「なかったこと」にしないために痕跡を残そうとしている。シアマのボタンを受け取った鑑賞者たちもまた、つねにすでに「なかったこと」にしないための協同作業に加担しているかもしれない。

参考文献

- エルノー、アニー「事件」『嫉妬』堀茂樹・菊地よしみ訳、早川書房、2004年、79-194頁 (Ernaux, Annie. *L'événement*, Gallimard, 2000)。
- 木下千花「妻の選択——戦後民主主義の中絶映画の系譜」『「戦後」日本映画論：一九五〇年代を読む』ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編、青弓社、2012年、143-170頁。
- シアマ、セリーヌ『燃ゆる女の肖像』ギャガ、DVD、2021年。
- 中谷文美「女が住まいを飾るとき——手芸の「過剰性」をめぐる」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社、2020年、200-215頁。
- Roth, Cassia. "Portraying Abortion in Portrait of a Lady on Fire." *Nursing Clio*. April 15, 2020. <https://nursingclio.org/2020/04/15/portraying-abortion-in-portrait-of-a-lady-on-fire/> (最終閲覧日：2022年6月28日)
- St. James, Emily. "Portrait of a Lady on Fire director Céline Sciamma on her ravishing romantic masterpiece." *Vox*. Feb 19, 2020. <https://www.vox.com/culture/2020/2/19/21137213/portrait-of-a-lady-on-fire-celine-sciamma-interview> (最終閲覧日：2022年6月28日)
- Sisson, Gretchen and Kimport, Katrina. "Telling stories about abortion: abortion-related plots in American film and television, 1916–2013." *Contraception* 89.5, 2014, pp.413-418.
- Syme, Rachel. "Portrait of a Lady on Fire" Is More Than a "Manifesto on the Female Gaze." *The New Yorker*. March 4, 2020. [newyorker.com/culture/cultural-comment/portrait-of-a-lady-on-fire-is-more-than-a-manifesto-on-the-female-gaze](https://www.newyorker.com/culture/cultural-comment/portrait-of-a-lady-on-fire-is-more-than-a-manifesto-on-the-female-gaze) (最終閲覧日：2022年6月28日)

凡例 本稿で（ ）に記載された経過時間はすべてセリヌ・シアマ『燃ゆる女の肖像』ギャガ、DVD、2021年にもとづいている。

追記 本稿は、2022年1月29日に開催されたRILAS研究部門「イメージ文化史」主催 ワークショップ「私たちは立ち上がる——『燃ゆる女の肖像』における生の取り戻し」内の発表「「なかったこと」にしないための協同作業——『燃ゆる女の肖像』における中絶表象」に加筆修正を施したものである。